

インド哲学仏教学

◇教員◇

教授 高橋晃一、加藤隆宏 准教授 八尾史
講師 Thomas Newhall 助教 佐久間祐惟

◇学生◇

学部 7名 修士課程 7名 博士課程 6名

(大学院学生数は、インド文学・インド哲学・仏教学専門分野としての総数)

インドの思想文化は、3000年にわたる長い歴史を通じて、きわめて多様な哲学的・宗教的な文化・文献を蓄積し、その豊かさと奥深さをもって、アジアはもちろん、西欧の人びとをも魅了しつづけてきた。なかでも、インドからアジア各地に広まった仏教は、東南アジア、東アジア、さらにチベットにおいて、今日も力強い生命を保ち、多くの人々の生きる指針となっている。洋の東西の知を架橋する、この思想文化に触れることは、現代の人びとが直面する諸問題に、新鮮で貴重な知見を与えてくれる。

インド哲学仏教学専修課程（略称：印哲あるいは印哲仏）は、こうしたインドの思想文化と、インドに起源をもちアジアの諸地域に展開した仏教の思想文化の、教育と研究を目的とする。その研究対象は、インドの古代から近代の思想文化に及び、仏教に関しては、インドはもちろん、他のアジア諸地域（東南アジア・東アジア・チベット）にまでわたる。きわめて広い研究領域をもつことは、本専修課程の特徴であり、大きな魅力の一つである。

インド思想ならびに仏教は長い歴史を持ち、広大な諸地域へと多様な展開をとげてきたので、その研究方法は多様であり、歴史学、考古学、人類学あるいは比較思想など、さまざまな切り込みが可能である。ただ、いずれの方法を取るにしても、それらに共通する基礎となるのは、文献の研究である。長大な歴史を通じて、人びとはつねに伝承された文献にみずからの現在を照らし、その理解をふたたび文献へと映し出していった。本専修課程では、思想の過程が深く刻まれた原典の解読に重点を置き、その基礎力の養成を目標とする。一見、迂遠とも思われるこの道筋は、その後のさまざまな研究の可能性を開く、最も確実なアプローチである。

奥ゆきの深い原典を読みこなすためには、語学力と思索力の双方が必要となる。

インド思想や仏教思想は、諸言語のなかで最も完成度の高い言語と見なされる**サンスクリット語**によって、その主要な原典が記されている。言語の完成度は思想の完成度に連動しており、中国や日本の仏教も、サンスクリット語によって思想の原型がかたちづくられている。原典の解説を通し、洋の東西の知の底流にある思想を解明することは、現代の諸問題をとらえるうえでの確固たる基盤の形成につながる。本専修課程がサンスクリット語の学習を尊重する所以である。

本専修課程に進学を希望する学生は、教養課程で哲学的なものの考え方に習熟するとともに、あわせて諸外国語（英語・ドイツ語・フランス語・中国語など）に積極的に挑んできてほしい。サンスクリット語文法は本郷でも開講されているが、駒場で学んでいれば、それだけ早く原典に向きあい、より深い世界を味わうことができるようになるだろう。

本専修課程は、起源を明治43年（1910年）に遡り、百年を超える歴史をもつ。この間、常に新しい問題意識に立って伝統を刷新しながら、日本の、ひいては世界の学界・思想界に大きな貢献をなしてきた。専修課程の名称として、長い間、創設当時の「印度哲学」を用いてきたが、平成6年（1994年）に、専修課程の内容をより見えやすくする目的で、「インド哲学仏教学」に改められた。

ここで本専修課程の専任教員とその専門、及び講義の内容を紹介しよう。

高橋晃一 教授はインド仏教の哲学思想を担当する。その主たる研究領域は大乗仏教の唯識思想で、特にその成立過程の解明を進めている。主著『『菩薩地』「真実義品」から「摂決択分中菩薩地」への思想展開』のほか、『唯識と瑜伽行（シリーズ大乗仏教7）』では「初期瑜伽行派」の章を担当している。また、2021年に『阿毘達磨集論』の伝承：インドからチベットへ、そして過去から未来へ』を出版した。さらに、2024年に、一般向けの概説書として『心と実存 唯識』を刊行した。2025年度は、演習では後期の仏教哲学文献である『タットヴァサングラハ』のサンスクリット原典を講読したほか、唯識派と双璧をなす中観派の基本文献である『中論』の輪読を行った。また、「**仏教概論**」では、インド仏教思想を理解するための基礎的な知識について解説した。

加藤隆宏 教授はインド哲学（仏教以外）を担当する。その主たる研究領域はヴェーダーンタ派の思想で、同派において聖典とされるウパニシャッド文献、『ブラフマ・スートラ』、『バガヴァッド・ギーター』に対する註釈文献などの分析を通じて、現代にまで脈々と受け継がれるヴェーダーンタ思想の展開について研究を進めている。講義では3000年におよぶインド思想を通時的に概観する「**インド哲学史概説**」を担当する。また、演習では、ニヤーヤ学派の根本経典『ニヤーヤ・スートラ』とその註釈『ニヤーヤ・パーシュヤ』、サーンキヤ学派の根本経典『サーンキヤ・カーリカー』とガウダパーダによる註釈『ガウダパーダ註解』などを

読み、インド哲学の基本教説および諸問題について学んでいる。また、註釈文献の取扱い方などについても解説する。その他、2026年度も引き続き「**サンスクリット語初級II**」(後期、駒場)を担当する。

八尾史 准教授はインド仏教(経・律)を担当する。仏教出家者集団の生活規則を集成した聖典「律蔵」を主な研究領域としており、特に經典、仏伝や説話類を大量に含みインド内外に広く伝播した「根本説一切有部律」とよばれる律蔵を扱ってきた。出家者たちの現実生活の諸問題に対処する律蔵と、個人の苦とそれからの解放を説く「経蔵」とがどのような相互関係のもとに成立してきたかに関心がある。学部の演習では、スリランカ、東南アジアの上座部仏教圏に仏典の言語として伝わったインドの言語であるパーリ語の文献を扱う。前半で文法を解説し、後半は經典を輪読する。また駒場ではSセメスターの「**比較思想**」で他宗教との比較を通していわゆる初期仏典の思想を紹介し、Aセメスターの「**インド哲学概論**」で大乘仏典までを含むインドの仏教聖典とそれらを取りまく仏教・仏教外の諸文献とその思想を解説する。

Thomas Newhal | 講師は、中国・日本仏教を担当する。2026年度の学部の演習では、戒律関係文献を講読し、インドで成立した戒律文献が東アジアで翻訳され、伝播していった過程を考察する。また「**比較仏教論**」では、仏教徒が長い歴史のなかで「心」をいかに理解してきたかについて、理論と実践への影響という点から解説する。

以上のほかに、非常勤講師の先生方が、サンスクリット語、チベット語、漢語にもとづく多彩な講義を開講している。2025年度は馬場紀寿教授(東洋文化研究所)が「初期仏教研究」(大学院と共通)、柳幹康准教授(東洋文化研究所)が「中国仏典講読」(大学院と共通)、片岡啓講師が「インド哲学の諸問題」(大学院と共通)、西沢史仁講師が「チベット仏教文献講読」(大学院と共通)、大鹿眞央講師が「日本密教文献講読」(大学院と共通)を担当した。

なお、梶原三恵子教授(インド語インド文学専修課程)が担当するサンスクリット語文法は、本専修課程の学生のほとんどが履修する。その単位は「サンスクリット語文法」または本専修課程の特殊講義の単位にあてることができる。また、「外国語」として開講されている「チベット語(1):口語文法」「チベット語(2):文語文法」および「ヒンディー語(1)(2)」も、大乘仏教やインド哲学の研究を深める上で聴講してほしい。



演習室の本棚

本専修課程の必修単位は44単位で、インド哲学概論・インド哲学史概説・仏教概論・比較仏教論から8単位、サンスクリット語文法4単位、特殊講義12単位、演習8単位、及び卒業論文または特別演習12単位である。その他、選択が32単位で、計76単位が卒業のために必要な単位である。単位取得に当って、例えば、教養課程でサンスクリット語文法を終えた学生は、改めてその授業を取らず、サンスクリット語を用いた演習によって代用できるなど、意欲ある学生のためにさまざまな配慮がなされている。また、選択履修の32単位分は本専修課程の開講科目に限定せず、文学部で開講されている多彩な科目を、各人の興味・関心に沿って、積極的に履修し、幅広い教養を身につけることも大いに歓迎される。

本専修課程では、卒業に当って、**卒業論文**のほか、**特別演習**を選択することができる。その場合、学生はサンスクリット文献（『アビダルマ・コーシャ・パーシュヤ』『バガヴァッド・ギーター』など）や漢文文献（『大乘起信論』『八宗綱要』など）、あるいはインド思想（史）・仏教思想（史）に関わる重要な文献・研究書から、3課題（各4単位）を選んで独習し、学年末に試験を受け、合格しなければならない。大学院に進学を希望する学生は、特別演習で原典解読の基礎力を養い、進学後、修士論文の研究課題に沿った原典の読解に着手することが通例となっている。一方、卒業論文に取り組む学生も、2年間の勉学の集大成として、各自で課題を見出し、有意義な研究成果を上げ、論文として提出している。

本専修課程は、教養学部から進学する学生のほかに、他専修課程、他学部、あるいは他大学を卒業してから学士入学する学生も含まれ、多彩である。

卒業後は大学院に進学する学生が多いが、教職や一般企業に就職する学生もいる。最近では官公庁、マスコミ、コンサルタント会社、出版社、メーカー等に就職する学生や、芥川賞を受賞した小説家も出ている。大学院はインド語インド文学専修課程と共同で、インド文学・インド哲学・仏教学専門分野を組織している。大学院の学生は若手研究者として評価されている者も多く、学部学生の学習を丁寧に補助してくれている。また大学院には、外国からの留学生も多く、文学部の中でも最も国際色が豊かな研究室の一つである。

大学院生に比して一学年の学部生の数は比較的小人数ではあり、学生同士、あるいは教員と学生の関係は緊密である。毎年春には、著名寺院の見学などを含む研修旅行を行ない、また年に数回の研究例会では、先輩たちの意欲に満ちた研究発表を聞くこともできる。

あらゆる面で昏迷の深い現代だからこそ、もう一度、人間精神の根本に立ち返り、インド思想や仏教の哲人たちの奥深いことばに静かに耳を傾けながら、現代に生きる意味をともに考え、語りあおうではないか。